

『不死身のジークフリートの素晴らしき物語』

— 韻文から民衆本へ —

石 川 栄 作

「ロゴスとポエジー」伊藤利男先生退官記念ドイツ文学・語学論集
論集刊行会発行

1995年3月

『不死身のジークフリートの素晴らしき物語』

—— 韻文から民衆本へ ——

石 川 栄 作

序

民衆本『不死身のジークフリートの素晴らしき物語』(Eine wunderschöne Historie von dem gehörnten Siegfried¹⁾)——以下『不死身のジークフリート』と略記——は、ドイツ民衆本の中では最も遅い時期に属する。この作品の成立事情に関して正確なところは確定されえないが、成立はだいたい十七世紀の半ば頃であつたろうと推定されている。一般に民衆本の成立は十五世紀に遡り、有名な『ティル・オイレンシュピーゲル』(1510/11)や『ファウスト博士』(1587)など多くの民衆本は十六世紀に出版され、比較的遅い民衆本『さまよえるユダヤ人』(1602)や『ハイモンの四人の子ら』(1604)でも十七世紀初頭には出版されていた事実を考え合わせると、民衆本『不死身のジークフリート』はかなり遅くなってから成立したものと言わなければならない。現存する最古の印刷本はブラウンシュヴァイク／ライプツィヒで印刷された1726年のものである。そしてその印刷本の表紙には「フランス語からのドイツ語訳、新版」と記載されているが、これは当時の人々のフランス風好みの風潮に迎合しようとしたものであろう。民衆本『不死身のザイフリート』がドイツ由来のものであることは自明の理であり、その直接の種本と見なされるのは十六世紀の韻文『不死身のザイフリート』(Der Hürnen Seyfrid²⁾)である。両者の間には韻文から散文へ書き換えられ、登場人物名なども現代風に改められているという相違はあるものの、中で語られている物語自体は大筋においてほぼ同じ内容と言ってよい。ただ韻文『不死身のザイフリート』において散見された矛盾、例えば、ザイフリートの少年時代の物語と乙女救出の物語の間に存在するいわば「裂け目」などは、民衆本になると修正されている。しかし、民衆本は韻文の矛盾を削除し、筋の展開を滑らかにしているだけではなく、いくつかの新しいエピソードも挿入されており、それが民衆本としての独自の特色を示す結果となっていることは言うまでもない。一体、この民衆本『不死身のジークフリート』は韻文『不死身のザイフリート』に対していかなる特質を示しているのであろうか。

本稿の目的は、韻文から民衆本への移行を一つ一つ考察することによって、民衆本としての『不死身のジークフリート』の特質を探り出すことである。

1. 不死身のジークフリート ― 鍛冶屋奉公と竜退治 ―

まずニーデルラントのジークハルドゥス王 (Sieghardus、韻文ではジークムント Sigmund) と妃との間の一人息子ジークフリート (Siegfried、韻文ではザイフリート Seyfrid) が父王の城から旅に出るまでの事情は、韻文の場合とほぼ同じである。すなわち、息子の勝手気儘な性格が悩みの種であった父王は、顧問官たちの進言を受け入れて、息子に旅立ちを許すことを決意する。顧問官たちの考えによると、要するに、世間で苦勞を嘗めれば、王子はきっと「立派な勇士」(ein braver Held) となるであろうというのである。ところが、民衆本ではこの場面でジークフリートはさらに性急な若者として描かれており、彼は父親が旅支度を整えてくれるのを待ち切れずに、別れも告げずに旅立ってしまうのである。

このような勝手気儘な若者がその後の冒険の旅でいかに「立派な勇士」へと成長するか、これがこの作品のテーマである。顧問官たちの進言の中にすでに物語のテーマが明示されている点は韻文と同じであるが、しかし、主人公が最初に辿り着いた村で鍛冶屋に奉公する動機として民衆本では空腹が指摘されている。ジークフリートは、つまり、「ほとんど二日間何も食べずに、強引な旅をしたため、空腹には我慢できなくなっていた」のである。鍛冶屋奉公はニーベルンゲン伝承の中でもかなり古い素材に属するものであるが、ここでは徒弟奉公の動機として主人公の空腹が指摘されることによって従来の英雄文学とは著しく性格の異なった伝承となっていることが明らかである。しかも空腹の描写は民衆本では再三再四繰り返されることになっていて、作品全体を貫くモチーフとなっていると言ってもよい。

ジークフリートはこうして食べ物と飲み物を求めて鍛冶屋に仕えたのであったが、翌朝さっそく仕事を始めてみると、何の役にも立たないばかりか、逆に厄介払いされる羽目に陥るのは、韻文とまったく同じである。そこで親方は若者を森の中の炭焼きのところに遣わせて、その近くに棲む竜の餌食にしようと企むものの、若者は逆に竜をいとも簡単に片づけて、さらに多くの子竜をも捕らえて、それらを焼き殺す。するとその脂肪が小川のように流れてきたので、それを身体全体に塗りつけると、両肩の間を除いてたちまち皮膚が角質化して、いわゆる「不死身のジークフリート」(der gehörnte Siegfried) となる。

この竜退治と皮膚の角質化の経過についても、韻文とほぼ同様である。ただこの場面でも、韻文では何の理由づけもなされていないのに対して、民衆本ではジークフリートの両肩の間だけが硬い角質とならなかった理由として、「恐らくそこへは手が届かなかったのであろう」というもっともらしい納得のゆく補足説明が付け加えられている。

このように民衆本の作者は細かな点に至るまで綿密な注意を払って、既存の物語をかなり現実的に忠実に描くよう努め、主人公の一つ一つの行動にもはっきりとした動機づけを与えようと努めていることが明らかである。主人公が不死身の肌となって、その後ライン河畔ヴォルムスの町へ出かけて行くのも、韻文では何の動機づけもされていないが、民衆本ではジークフリートは恐らく今後では「すっかり変身した騎士」(ein anderer Cavallier)として行動することができると思ったからである。身体の角質化はここでは変身のきっかけとして主人公自身によって確信されているのであり、以後主人公はいわゆる騎士として行動すべく、今や世に広く知られたライン河畔ヴォルムスのギバルドゥス王(Gibaldus、韻文ではギービヒ王 Gybich)の宮廷へ出かけて行くのである。

2. ヴォルムスでのジークフリート — フローリグンダ姫の誘拐 —

そのヴォルムスのギバルドゥス王には三人の息子と一人の娘がいて、フローリグンダ姫(Florigunda、韻文ではクリームヒルト Krimhilt)が竜に誘拐される状況設定などについても、韻文とほぼ同じである。ただこの誘拐の場面でも民衆本の作者は細かな点にまで綿密な注意を払っている。すなわち、韻文では17詩節3-8行で簡単に「彼女がある昼に(vmb ein mittag)窓辺に立っていると、そこへ竜が飛んで来て、彼女を奪い去ってしまった」と語っているだけであるのに対して、民衆本ではそれを補足して、それは「ある暑い昼間(an einem heissen Mittag)の出来事で、彼女が窓辺に立っていたのも「爽やかな空気を吸い込むため」(frische Lufft zu schöpffen)であったとされ、誘拐の状況を納得のゆくような設定にしている。

その後、乙女が竜の岩山で恐怖を抱きながら暮らすうち、ある復活祭の日には、竜が一時的に人間の姿に戻って、両者の間に会話が交わされる場面についても、韻文とほぼ同様である。特にこの場面は韻文と逐語的に同じ言い回しさえ見出されるほどで、韻文からそのまま踏襲されたものと考えてよい。すなわち、乙女はしきりに父母のもとに帰してほしいと頼むが、竜はもちろんそれを許さない。竜は五年後の復活祭の日には再びすっかり人間に戻る⁴⁾ことになっているの

で、そのときに乙女を妻にしようと思っているのである。この無慈悲な竜の考えを聞いた乙女が毎日悲嘆に暮れて過ごしていたことは言うまでもない。

今や四年が過ぎ去って、その苦境の中の姫を救い出すのがジークフリートである。しかし、この主人公の介入についてはかなりの改作が認められる。まず韻文では主人公ザイフリートに関して甚だしい矛盾が読み取られることはよく知られたことである。韻文 33 詩節で再度紹介されて登場するザイフリートは、冒頭ですでに登場し、顧問官たちの進言によって父王の城から旅立った腕白少年と同一人物であるのか否か、はっきりしない箇所が随所に見出される。ザイフリートがやがて竜の岩山へ出かけて行く際にも、12 詩節との関係で彼がすでにギービヒ王に仕えていたのか否か、はっきりとしていない。こうした韻文の矛盾や裂け目をなくすために、民衆本の作者は、韻文 13-15 詩節に挿入されていたニープリングの財宝とそれに起因する悲惨な殺戮の描写を削除して、物語の時間的順序を秩序正しく並べ変えるとともに、筋立てを滑らかなひとつづきのものにしている。もちろん韻文の要素がすっかり削除されたわけではなく、例えば、「ジークフリートは今や男らしい力 (zu seinem männlichen Kräfte) を具えるに至り、熊や獅子をつかまえては (die Bären und Löwen fienge)、それらを木に吊しておもしろがっていた (dieselben zum Gespött an die Bäume henckete)」という表現は明らかに韻文 33 詩節から逐語的に踏襲されたものである。ただこうして野獣をつかまえては木に吊したりするジークフリートの「男らしい力」は、民衆本ではことごとくギバルドゥス王を慰めるという新しい行為へと組み入れられており、それによって民衆本ではジークフリートは、竜の岩山に出かける前には、ヴォルムスのギバルドゥス王に仕えていたことが明確にされているのである。ジークフリートは今や他人に仕える人物であり、父王の城や鍛冶屋でのような勝手気儘な乱暴な若者ではない。かつて父王の顧問官たちが期待していたように、主人公には成長の跡が十分に窺われるのである。

その主人公の真に立派な成長ぶりが明らかにされているのが、ギバルドゥス王によって催された競技においてである。各国の国王たちが居並ぶ中で催された槍試合で、ジークフリートは見事な働きぶりを示して、賞を授けられ、名誉のしるしに黄金の鎖を手にすると同時に、騎士の位をも授けられたのである。ジークフリートのこの賞賛は今や彼が乙女フローリグンダを竜の岩山から救い出すのに十分成長したことをも意味していると言ってよいであろう。槍試合でから得た大変価値のある美しい黄金の鎖も、のちに乙女への愛のしるしとしての贈物となることを考え合わせると、ここで描写されたジークフリートの並々

ならぬ騎士としての力はすべて乙女救出の冒険のために用意されたものであることが容易に理解できるのである。

3. 乙女救出のジークフリート ―一連の冒険―

こうして騎士の位も授けられ、心身ともに大きな成長を遂げたジークフリートは、ついに乙女救出の手がかりを見つけて、鬱蒼とした森へ出かけて行く。そこで繰り広げられる一連の冒険に関しても大筋においては韻文の場合と同じ展開であるが、もちろん民衆本には新しい挿入エピソードもいくつか見出される。

ある夜、ジークフリートが美しいフローリグンダの夢を見たのも新しい挿入エピソードの一つである。その夢でうれしくなったジークフリートは、翌朝狩りに出かけて、森の中で竜が乙女を連れ去った足跡を発見するのであり、民衆本では最初から乙女への愛と竜退治とが一つに結びつけられている。⁵⁾その足跡を追いかけて、四日目に空腹に襲われたときも、ジークフリートは「自分自身のことは忘れて、常に美しいフローリグンダのことだけを考えていた」と語られている。この空腹はかつての鍛冶屋奉公の際の空腹と対比されていることは明白であるが、ここでは乙女フローリグンダへの愛と関連づけられて、空腹は克服されている。ただ馬はそういうわけにはいかないのが、ジークフリートは馬から降りて馬に草を食べさせていると、森の中から思いがけず一匹の大きな獅子がジークフリートめがけて突進して来る。ジークフリートは休む暇とてなく、その獅子の口をつかんで、それを二つに引き裂き、木に吊してしまう。この獅子のエピソードは韻文 33 詩節の名残りであろうが、民衆本では乙女救出のための最初に克服すべき冒険として一連の冒険の中に組み入れられているのである。

次に襲いかかってくるシチリア出身の武装した騎士のエピソードも民衆本の新しい独自の創作である。行く手に立ちはだかる騎士の挑戦を受けて、ジークフリートは雄々しく戦い、騎士に致命傷を負わせてしまうが、すぐにそれを後悔する。乙女を連れ去った竜の情報を聞き知るチャンスを失ってしまったからである。従って、この騎士のエピソードはのちに打ち負かす巨人ヴルフグラムベアー (Wulffgrambåhr、韻文ではクペラーン Kuperan) の命を二度までも助けておくことを動機づけているとも言える。しかも騎士の馬はあとで再度登場することを考えると、この騎士のエピソードは単なる挿話ではなく、全体の筋立てに有機的に関わっていることが明らかである。さらにここでもはや空

腹のモチーフが取り入れられていることにも注目されたい。ジークフリートは、すなわち、倒した騎士の武器からは楯と兜以外には何も取らなかったのであるが、それは「三日間食事を取っておらず、疲れているため、すべての鎧を身につけることはできない」からであり、また何よりも「立派な鎧（角質）をすでに身につけていた」からである。空腹のモチーフが効果的に用いられて、ここでは従来の英雄文学には見られないユーモアさえ感ぜられて、民衆本としての特色がよく出ている箇所である。

この独創的な騎士エピソードとは反対に、次に出会う侏儒王エグヴァルドゥス（Egwaldus、韻文ではオイゲル Eugel）のエピソードは韻文から踏襲されたものである。ただ韻文 47 詩節に突然挿入されて、物語全体の構造を根底から壊していた主人公の出生についての矛盾は、当然のことながら削除されており、それに伴って韻文において不可解であった父母の名前に関する質問も父母の安否を気遣う質問に修正されている。このような細かな改作はあるものの、大筋は韻文とほぼ同じと考えてよいであろう。ともかくジークフリートは侏儒王から竜に捕らわれている乙女フローリグンダの消息を聞き、さらにその竜の岩山に通ずる道の鍵を巨人ヴルフグラムベアーが持っていることを聞き知ると、さっそく侏儒王に案内させて、その巨人の住処^{すみか}へと赴くのである。

その巨人ヴルフグラムベアーとの三度にも及ぶ戦いについても、韻文とほぼ同じ展開である。しかも細かな点に至るまでの一致さえ見出される。例えば、巨人の住処の前での最初の戦いでジークフリートが巨人に負わせた傷は韻文と同じく十六箇所であり、その後侏儒王の霧の頭巾（Nebelkappen）で窮地を脱した二回目の戦いで巨人に負わせた傷も韻文と同じく八箇所である。いずれも乙女フローリグンダ救出の手がりを失わないために、ジークフリートは巨人を生かしておくが、竜の岩山に辿り着いて姫との再会を果たしたあとの第三の戦いではその不実な巨人を岩山から投げ落として殺してしまうことなども韻文と同様である。もちろん逆に細かな改作を施された箇所もないわけではない。韻文 87 詩節の「ある川の土手」（für eyens wassers tham）は「陰気な谷」（in einen finstern Thal）に置き換えられて、不気味な吠え声の響き渡るその谷間にさしかかっても、「ジークフリートは災いを恐れるのではなく、すぐにも美しい乙女と竜に出会えることを望み、期待していた」と語られ、その語句の入れ替えは効果的な働きをしている。また竜の岩山で乙女と再会を果たした場面でも、両親と三人の兄弟の消息を聞く乙女に対して、韻文では欠けていたその回答を民衆本では補足挿入して、ジークフリートが「四日前に出発するときには皆まだ元気であった」ことを簡単に知らせており、民衆本の作者が細かな点

にまで注意を払って、前後関係を滑らかにしていることが明らかである。否、それどころか、作者の細かい注意は韻文から踏襲したものにおいてすら見出される。それを端的に示しているのが、巨人を倒してしまったあとで乙女がジークフリートに竜の恐ろしさを伝えている場面である。韻文 117 詩節では次のように語られている。

Do sprach der held Seyfride:	ザイフリートが言った。
„Nahet vns dann groß arbeyt,	「大きな災いが近づいているとは、
Das ist mir innigklichen	それはまことに私には
Von gantzem hertzen layd.	心底から残念なことだ。
Nun bin jch doch genesen	今や私は
Biß an den vierdten tag	四日目に至るまで
Vngessen vnd vntruncken	何も食わず何も飲まず、
Vnd keyner rhû nie pflag.“	また少しの休息もとっていないのだから。」

韻文では続く 118 詩節の記述からも分かるように、ザイフリートのこの言葉は「下品なもの」(vngemut) と理解されているのに対して、民衆本では次のように語られている。

Hieran, sprach der Ritter, ist wenig gelegen, nur dieses ist mein grôster Kummer, daß ich in vier Tagen weder gegessen noch getruncken, viel weniger einiger Ruhe gepfleget habe.

「そのことは」騎士が言った、「たいして問題ではない。ただ私の最大の苦しみは、四日間何も食わず何も飲んでいないし、また少しの休息もとっていないということだ。」

侏儒王と乙女は確かにこのジークフリートの言葉に大変驚くが、しかし、韻文においてのような「下品さ」は感ぜられず、逆にジークフリートの勇敢さが強く伝わってくることは明白である。民衆本の作者はここで空腹のモチーフを逐語的に踏襲しつつも、まったく異なったコンテクストへと効果的に発展させていることが容易に理解できよう。

さて、ともかく巨人を倒したあとは、韻文と同様、いよいよ竜との戦いである。ここでも空腹のモチーフが踏襲されていて、侏儒王の計らいで運ばれた食事をジークフリートはまたもや口にしないうちに、竜と戦わねばならないのであるが、この竜との戦いに関しても韻文とほぼ同じ展開と言ってよい。槍三本分の長さの火炎を吐く竜と戦ううち、ジークフリートは自らの角質が軟らかくなってきたので、洞穴へ逃げ込んだところ、そこで侏儒エグヴァードゥス

(Egwardus、韻文ではニープリング Nybling) の財宝を見つける^{くたり}件も韻文とまったく同様である。もちろんそれが侏儒一族のものであることをジークフリート自身は知らない。財宝のことなどは今の彼にはどうでもよいのである。洞穴で涼をとったのち、再度竜に立ち向かい、竜の岩山で入手していた特殊な剣——竜を倒すにはこの剣をおいてほかにはないという——でもってついに竜を打ち殺してしまうまでの筋立ても韻文とほぼ同じである。ただその際ジークフリートは神に身を捧げる敬虔な騎士として描かれていることが目立っている。確かに韻文でもその傾向は随所に見出されるが、民衆本ではそれがよりいっそう著しくなっていて、ジークフリートは竜と戦う前に神に祈りを捧げる場面さえ新たに取り入れられている。主人公は内面的にも著しい成長を遂げたことがよりよく理解されよう。かつての竜退治は自らの命を助けるための戦いに過ぎなかったが、このたびの竜との戦いは乙女を救い出すための戦い、つまりは乙女のアを求めての戦いなのである。

従って、竜との戦いのあとの場面では、伝統的なニーベルンゲン伝承とは異なっていて、身体のア質化でもなく、また財宝獲得でもなく、竜退治の新たな動機となっている主人公と乙女との間のアの合一が展開されている。しかもそのアの合一は、韻文でのように二人とも互いに失神することによってばかりではなく、民衆本ではさらに二人の間でアの対話が交わされることによって高められている。すなわち、侏儒王の計らいで最上の食事や美しい音楽、踊り等で楽しいひとときを過ごしたあと、ジークフリートは危険な冒険に駆り立てたのは何かと尋ねるフローリグンダに向かって、次のように自らの心のうちを打ち明ける。「いとも名誉深き徳高き乙女フローリグンダよ、この危険な旅と幸運無事な冒険に私を唆し駆り立てたのは、あなたのアの美しい親密さと気高い美德以外の何ものでもありません。これこそが、私があなたを救いたくて、自分の命を願うこともせずに、自分の命を賭けた唯一の理由なのです。」ジークフリートのこの言葉を聞いたフローリグンダは美しい頬に多くの涙を落としながら、高価な美しいダイヤモンドの指輪を自分の手から引き抜いて、騎士の指にはめてやる。その気高い贈物の返礼としてジークフリートは、かつて彼女の父の宮廷での槍試合で勝ち得ていた黄金の鎖を自分の首から取りはずして、それを乙女の首にかけてやる。この互いの行為によって「二人のアと誠実は確かなものとして証明された」と民衆本の作者自身によっても語られている。この美しいアの贈物の交換の場面は韻文には伝承されていない民衆本独自の挿入エピソードであり、以上見てきた竜の岩山でのすべての冒険はこの乙女のアを求めての行為だったことが容易に理解できるであろう。

4. 帰途につくジークフリート — 侏儒一族の財宝 —

こうして一連の冒険を克服したジークフリートは、翌朝、食事をとると侏儒一族に^{いとま}暇を告げて、乙女フローリグンダを連れてライン河畔ヴォルムスへと帰途につくのであるが、この旅立ちから侏儒王がジークフリートの将来を占う場面までは、フローリグンダ姫に美しい乗馬が贈られたことを除けば、韻文とほぼ同じ展開である。

ところが、その後ジークフリートが旅の途上で財宝のことを思い出し、竜の岩山へ引き返して財宝を運び去るエピソードについてはかなりの改作が施されている。まず韻文ではその財宝はやがてライン河に沈められることになっていて、その場面は 167 詩節で次のように語られている。

Do er kam an den Reyne,	彼はライン河畔にやって来ると、
Do dacht er in seym müt:	心の中で考えた。
„Leb jch so kurtze zeyte,	「私がこんなに短い命であるなら、
Was sol mir dann das güt?	この財宝は何の役に立とう。
Vnd sollen alle Recken	そして私のために
Vmb mich verloren seyn,	すべての勇士が死ぬことになるなら、
Wem soll dann dises güte?“	この財宝は誰のものになるのか。」
Vnd schüt das in den Reyn.	こうしてそれをライン河に沈めた。

ニーベルンゲン伝説の名残りとどめるこの詩節を民衆本の作者は大幅に改作して、自らの新しい二つのエピソードを挿入している。その一つは、ジークフリートが乙女とともに財宝を自分の馬に積んで進んでいると、例のシチリア出身の騎士の馬が歩き回っているのに出くわしたことである。ジークフリートは財宝をその馬に積み換え、やっと自らの馬に跨がることができるのであり、民衆本の作者は馬の数にさえ注意を払っていることが明らかである。二つ目の新しいエピソードは、こうして二人がそれぞれの馬に乗って旅を進めていると、十三人の盗賊が現われ、たちまち取り囲まれてしまったことである。連中が娘をよこせと脅かすと、乙女はジークフリートに「財宝を渡しましょう。そうすれば見逃してくれるでしょう」と言ったのに対して、ジークフリートは「私は財宝などにはあまり重きを置かないが、その財宝のために愚弄されたくはない」と答えて、連中を相手にして戦い始める。この戦いの最中にジークフリートは、乙女を盗賊たちから護るために、財宝の馬を放してしまわねばならない状況に追い込まれたのである。乙女フローリグンダは、救い出されてから財宝の馬のことを尋ねると、ジークフリートは答えて言う。「あなたに対する強い愛情が、

財宝などどうでもいいような気持ちにさせてしまい、私は財宝を積んだ馬を逃がしてやりました。〔中略〕見つけ出した財宝なんかどうでもいいのです。それよりもあなたの方が私にとってははるかに高価だったのです。」このジークフリートの言葉によって、民衆本では財宝は乙女への愛と関連づけられていることが明らかである。乙女もこの言葉をうれしく思って、その馬を捜し出すことはやめることにした。一方、ジークフリートも侏儒王より自分の寿命がわずかに八年だと占われていたので、財宝が何の役に立つかと考えて、そのまま馬を進めてライン河畔へと戻って来たのである。民衆本では財宝獲得とその後の財宝放棄のエピソードはかなり変更されて取り入れられていることが容易に理解されよう。しかもこの財宝獲得と放棄のエピソードは、竜退治と同様、ことごとくジークフリートの乙女への愛と関連づけられているのである。

5. ジークフリートの結婚と暗殺 — ヨルクスとツィフェレスの決闘 —

こうして竜退治のみならず、財宝の一件でも乙女への愛を確証してみせたジークフリートは、彼女とともにヴォルムスの町に入ると、堂々たる陣容で出迎えられて、結婚式が執り行われる。韻文と同じ展開であるが、この結婚式の場面でも新しいエピソードが挿入されている。狡猾な一人の貴族が人々を楽しませるために考えついた悪戯、すなわち、ギバルドゥス王に仕えていた農夫ヨルクス (Jorcus) とジークハルドゥス王の兵士ツィフェレス (Zivelles) の二人による決闘⁶⁾がそれである。二人は劣らず大変臆病な性格の持ち主であることが知られていたため、実に滑稽な闘いが繰り広げられるのであるが、この決闘は騎士競技のパロディとも言うべきものであろう。騎士ロマーンに読み取られうるような勇猛果敢な心意気は一切見出されずに、逆に臆病な物腰が展開されて滑稽極まりないと言うはかない。騎士ロマーンが戯画化されているのである。

ところが、この滑稽な決闘はのちのハーゲンヴァルト (Hagenwald、韻文ではハーゲン Hagen) の死と結びついて、この作品の中でも一段と効果的な働きを示していることは見逃してはなるまい。すなわち、その後ジークフリートが暗殺されて、その復讐のための戦いが繰り広げられたとき、ハーゲンヴァルトは慈悲を得ようと思って臆病なツィフェレスに降伏するが、その理由は「他の勇敢な兵士に降参するよりもずっと安全だと思った」からである。ところが、臆病者ツィフェレスは今こそ絶好の機会だと思って、ハーゲンヴァルトが眠り込んだところを刀で突き刺して殺してしまうのである。エッダやサガあるいは『ニーベルンゲンの歌』において勇猛な最期を遂げたこの勇士は、民衆

本ではまったく逆の恥辱的な最期を遂げているとしか言いようがない。ツィフェレスが突き刺した際に言っているように、ハーゲンヴァルトは「自分が計った尺度で同じように計られた」のである。

ハーゲンヴァルトのジークフリート暗殺行為は、従って、民衆本では否定的に理解されていることが明らかである。もっとも暗殺の原因は韻文の場合と同じく、妻フローリグンダの三人兄弟——エーレンベルトゥス (Ehrenbertus、韻文ではギュンター Günther)、ハーゲンヴァルト及びヴァルベルトゥス (Walbertus、韻文ではギールノート Gyrnot)——がジークフリートの賞賛に嫉妬の念を抱いたことである。暗殺の機会はなかなか見つからなかったが、侏儒王が予言したように、八年目に絶好のチャンスが訪れ、義兄弟たちと狩りに出かけたジークフリートは、オッカーヴァルト (Ockerwald⁸⁾) の泉に顔を浸して涼をとっていたところを、背後からハーゲンヴァルトによって両肩の間を突き刺されてしまうのである。表面的には伝統的なニーベルンゲン伝承と同じ展開であるが、内面的にはのちのハーゲンヴァルトの死に方によってかなり性格の異なったものとなっていると言わなければならない。韻文ではまだかすかにハーゲンの英雄主義的な行為の名残りが感ぜられるのに対して、この民衆本ではまったくハーゲンヴァルトの行為は卑劣で臆病な行為としてしか理解されてはいないのである。

従って、民衆本ではその卑怯な暗殺に対する「十分な復讐」——韻文では侏儒オイゲルの予言ではのめかされているだけである——がそのあとに付け加えられて語られている。しかもその復讐は伝統的なニーベルンゲン伝承とはかなり異なった内容となっている。まずその復讐に先立ってフローリグンダの父母が心痛のあまり病死してしまうさまが語られているが、これは彼女の復讐への意志の強さを示すものと言えよう。すなわち、フローリグンダも悲しみのあまり死んでしまったとしても、決して不思議ではなかったであろうが、しかし彼女はそうしてはいられなかった。何としてもジークフリートの死の復讐をしないではいられなかったからである。彼女は次第に回復し、すっかり元気を取り戻すと、ついに復讐を実行するのであるが、伝統的伝承と異なるのは、フローリグンダが息子レーヴハルドゥス (Lôwhardus) とともにニーデルラントの義父ジークハルドゥス王のもとに赴き、その援助でもって復讐を遂げている点である。この戦いは何千という勇士の命に関わることとなり、ハーゲンヴァルトが恥辱的な死に方をしたことはすでに述べた通りである。臆病なツィフェレスも、また農夫ヨルクスもこの戦いで命を落としたが、さらにフローリグンダも死ななければならなかった。ところが、ほかの二人兄弟エーレンベルトゥス

とヴァルベルトゥスはその国から追放されるだけになっていて、伝統的伝承とは異なる。また彼女の息子レーヴハルドゥスも祖父ジークハルドゥスの宮廷に留まり、その地で神に対する敬虔な気持ちと騎士の徳に包まれて育てられ、立派な勇士に成長したという。このようにジークフリートの結婚と暗殺に関する場面では、伝統的伝承とはまったく異なった新しい伝承が取り入れられていることが明らかであり、特に二人の臆病者の滑稽な決闘が新しく織り込まれることによって、新たな性格の物語に発展していることが容易に理解できよう。

結 び

以上のように見てくると、民衆本『不死身のジークフリート』の作者は、韻文の矛盾を削除しただけではなく、随所に新しいエピソードを挿入することによって、主人公ジークフリートを理路整然としたかたちで自らの物語世界へ取り入れていることが明らかである。それによってジークフリートの成長過程が段階的に秩序正しく描写される結果となっている。すなわち、父王の城で勝手気儘な王子であったジークフリートは、森の中の鍛冶屋では依然として乱暴な若者に過ぎなかったが、竜退治のあと「不死身のジークフリート」となって赴いたライン河畔のヴォルムスでは明らかにギバルドゥス王に仕える騎士となっている。持ち前の「もの凄い力」もここでは娘をさらわれたギバルドゥス王を慰めるための行為へと組み入れられている。フローリグンダ姫の夢を見て出かけて行った竜の岩山での竜との戦いも、自らの命を救うための戦いに過ぎなかった以前の竜退治とはすっかり異なって、今や敬虔な騎士として他人を救い出すための行為なのである。しかも民衆本では竜退治と乙女への愛とが最初から一つに結びつけられており、一連の冒険ではそれだけいっそう姫への愛もきわだたされている。否、それだけにとどまらず、竜との戦いののちの財宝獲得と放棄のエピソードについても、すべてが乙女フローリグンダへの愛に結びつけられている。ヴォルムスに帰還後のフローリグンダとの結婚はその勇敢な騎士的行為の当然の報酬である。このように騎士の勇敢な行為が女性の愛を求めての行為にも結びつけられているのは、騎士ロマンの特色の一つである。不死身のジークフリート物語は、民衆本ではもはや英雄文学ではなく、騎士ロマンに数え入れられるべきであろう。

民衆本『不死身のジークフリート』が騎士ロマンの系列に組み入れられようとしていることは、冒頭の前置きでジークフリート物語を十五世紀の民衆本『ラーデのヴィゴライス』(Wigoleis vom Rade, 1493) — ヴィルント・フォ

ン・グラーフ・エンベルク (Wirnt von Grafenberg、1200 年頃) の叙事詩にまで遡るとされる⁹⁾——に関連づけていることから明らかである。しかし、民衆本の中で語られたジークフリート物語は単なる騎士ロマンでないことも明らかである。ジークフリートが騎士の位を授けられた前半のヴォルムスでの華やかな騎士競技の描写は極力避けられていて、後半のヴォルムスでの婚礼の際にも描写されているのはヨルクスとツィフェレスという二人の臆病者の滑稽な決闘である。この臆病者の決闘は騎士競技のパロディであり、騎士ロマンが戯画化されているのである。まさにこの滑稽さが民衆本としてのこの作品の特色であるが、この二人の臆病者の決闘はハーゲンヴァルトの死にも多大の影響を及ぼしており、ハーゲンヴァルトが臆病者ツィフェレスに降伏して恥辱的な最期を遂げる件はかつての英雄文学とは裏返しの関係にあると言えよう。否、ハーゲンヴァルトだけではなく、主人公ジークフリートが空腹を感じ、食べ物を求めて鍛冶屋に奉公する件も伝統的なニーベルンゲン伝承と裏返しである。また韻文では矛盾によってかえって英雄文学の名残りをとどめていたのに対して、民衆本では至るところに現実に忠実な描写が付け加えられることによって民衆文学的な特徴をもたらす結果となっている。こうして民衆本『不死身のジークフリート』は、ドイツ古来の伝説を素材としながらも、韻文『不死身のザイフリート』とはまったく異なって、従来の悲劇性をまったく感じさせることもなく、むしろ反対にところどころで滑稽なユーモアさえ感じさせながら、いわば民衆本に特有の「読んで楽しい」タイプの物語として民衆の間に広く普及していったのである。

注

- 1) テクストにはゴルター版 (Wolfgang Golther, 2. Auflage. Halle: Max Niemeyer 1911) を用いる。なお、邦訳に櫻井春隆訳 (『不死身のジークフリートのいともしき物語』国書刊行会 1987 年) があり、随時参照する。
- 2) テクストには民衆本と同じくゴルター版を用いる。なお、韻文作品の詳細は拙稿「『不死身のザイフリート』におけるザイフリート像の特質」(徳島大学教養部紀要「外国語・外国文学」第 4 巻 1993 年) を参照されたい。
- 3) 母妃の名前は、韻文と同じように、のちに登場する侏儒王によって明らかにされるが、名前はジークリング (Siglinge) からアーデルグンダ (Adelgunda) に変更されている。
- 4) 韻文と同じように、民衆本でものちの竜との戦いの際に再度竜の身の上が語られているが、それによると、竜はもともと人間であったが、ある女性の呪いによって竜の姿に変えられており、すっかり人間の姿に戻れるのは五年後だというのである。
- 5) 韻文では主人公が乙女のために竜と戦う決意をするのは、森の中で出くわした侏儒

王に詳しい事情を聞いてから（50－52 詩節）である。

- 6) この決闘エピソードは英国詩人フィリップ・シドニー（Philip Sidney, 1554－86）の小説『アーケイディア』（Arcadia）のドイツ語訳から借用されたものと考えられている。（Vgl. Deutsche Volksbücher in drei Bänden. Erster Band. 5. überarbeitete Auflage. Berlin und Weimar: Aufbau 1992. S. XLV und S. 315.）
- 7) Vgl. ebd. S. XLV.
- 8) 韻文のオッテンヴァルト（Ottenwaldt）を民衆本ではこの地名に変えているが、オッカーはアラー河の支流で、北ハルツ地方にあったことから、民衆本の作者はブラウンシュヴァイクの出身であったと推定される。（Vgl. ebd. S. 318.）
- 9) Vgl. ebd. S. 316.